

2023 年度新収蔵資料の紹介 2

—大川原徳右衛門の選挙ポスターと三浦政治の書簡—

小川正人

- 目次
- 1 大川原徳右衛門の選挙ポスター
 - 1-1 資料の概要と寄贈の経緯など
 - 1-2 資料の背景—戦後の国政・道政選挙へのアイヌ民族の立候補—
 - 1-3 参考資料（第22回衆議院議員総選挙関係資料）
 - 2 三浦政治の書簡
 - 2-1 資料の一覧と寄贈の経緯
 - 2-2 三浦政治関係資料と本資料群の位置
 - 参考文献

Key Words

アイヌ史 (History of the Ainu)、戦後アイヌ史 (Post War History of the Ainu)、
アイヌ教育史研究 (Research on history of the education for the Ainu)、
春採尋常小学校 (Harutori elementary school (One of the elementary schools purpose-built against the
Ainu Children in Modern Hokkaido))

本稿では、2023年度までに当館アイヌ民族文化研究センターが担当となって受け入れた資料のうち、表題に挙げた文書資料2件について紹介する。

1 大川原徳右衛門の選挙ポスター

1-1 資料の概要と寄贈の経緯など

まず紹介するのは、鶴川村萌別（現むかわ町春日）出身の大川原徳右衛門の政見演説会を告知するポスターである。公益社団法人北海道アイヌ協会理事（当時）で同じむかわ町春日出身の阿部一司氏より、当館の前身の一つである北海道立アイヌ民族文化研究センターに寄贈され、北海道博物館の開設後の2021（令和3）年4月開催の北海道博物館資料審査会において受入れを決定したものである。

ポスターには「衆議院議員候補者」とあるだけで、選挙名や年次等の記載は確認できないが、大川原徳右衛門が衆議院議員選挙に立候補したのは1946（昭和21）年4月10日に投票が行われた第22回衆議院議員総選挙のみであること、日本自由党の公認を受けている旨のポスターの記載も当時の選挙情報と合致することから、この

第22回衆議院議員総選挙のポスターであると見なすこととした。

大川原徳右衛門は、同じ萌別出身で長年にわたり鶴川村議などを長年つとめた大川原コピサントクの親族である。コピサントクに比べるとその経歴や生涯を伝える記録は多くはないが、早くは1916（大正5）年の萌別備荒貯蓄組合⁽¹⁾の「精算委員会人名取調簿」の中にその名があり、1926（大正15）年の総会では2名の議事録署名人のうちの一人となっており、1945（昭和20）年の「確定組合員名簿」にもその名がある⁽²⁾ので、コピサントクらとともに地域社会の一員として活動していたことがわかる。また1948（昭和23）年に鶴川村農業会から鶴川村農業協同組合となったときの理事をつとめている⁽³⁾。

選挙や北海道アイヌ協会との関わりでは、『北の光』創刊号（北海道アイヌ協会、1948年）によれば1948年9月に開催されたという北海道アイヌ協会の「社員総会」において、その議事終了後に開催された「全道ウタリーの弁論大会」の「成績審査員」の一人が大川原徳右衛門である⁽⁴⁾。さらに同書の「アイヌ人物紹介」欄には大

小川正人：北海道博物館 アイヌ民族文化研究センター長

(1) 大川原コピサントクら萌別の人々が1905（明治38）年に創設したとされる。

(2) 以上は『平成12年度 萌別地区百年の記録 ～萌別備荒貯蓄組合のあゆみを中心として～』（萌別地区アイヌ生活文化伝承の会、2001年）による。

(3) 『続 鶴川町史 資料編』（鶴川町、1991年）、138ページ。同書によれば1948年から49年までの在任であった。

(4) 『北の光』創刊号（北海道アイヌ協会、1948年）、34ページ。

川原徳右衛門も紹介されており、「鶴川村の産、自由党の鶴川支部長、ウタリー界の政治家元気もよい、押しも強い希くば互譲を欲す。」⁽⁵⁾とされている。

ポスターのサイズはタテ52.5×ヨコ37.6センチ。上と下に「日本自由党公認/衆議院議員候補者」「政見/発表/演説会」の文字、上から下に候補者の氏名と顔写真が配されている(写真1)。このほか演説会の開催月日、開始時間、会場、出演者、責任者を記載する箇所があるが、いずれも空欄である。寄贈者の阿部一司氏は大川原徳右衛門と親戚関係にあり、一司氏の父・阿部政司氏は大川原徳右衛門と交友が深かったとのことなので、未使用のポスターが阿部氏のもとで保管されてきたものと推定することができる。ポスターには若干の汚れや端部の小さな破れなどは確認できるものの、特に目立った汚損や損傷はなく保存されてきた。なお表面、裏面とも、目視の限りでは書き込みは確認できない。

著者の知る限りではあるが、本資料と同じポスターと目されるものが国立民族学博物館に5点所蔵されている⁽⁶⁾。従って本資料が格段に希少なものとは言えないとは思いますが、後述するとおり、日本国家の敗戦後間もない時期におけるアイヌ民族の様々な活動の一端を示すものであり、この資料から様々な論点や史実へと調査や考察を払げることができる(あるいは、それを促す)、大切な資料の一つであると考えられる。

1-2 資料の背景—戦後の国政・道政選挙へのアイヌ民族の立候補—

第22回衆議院議員総選挙には、アイヌ民族であることをみずから公表するか、またはアイヌ民族に出自を持つと認識されていた候補者が3名いた⁽⁷⁾。大川原と、同じ

むかわの辺泥和郎⁽⁸⁾、樺太(サハリン)出身の川村三郎⁽⁹⁾である。

アイヌ民族の町村会議員や市町村議会議員は、戦前・戦後を通して各地で確認できる⁽¹⁰⁾が、日本の敗戦直後の1946~47年には、国政・道政選挙への立候補が相次いだ。筆者が知り得た限りでまとめると、該当する選挙と立候補者は次のとおりである。

1946年4月10日投票 第22回衆議院議員総選挙
北海道一区

大川原徳右衛門、辺泥和郎、川村三郎

1947年4月5日投票 北海道庁長官選挙

佐茂菊蔵⁽¹¹⁾

1947年4月25日投票 第23回衆議院議員総選挙
北海道四区

佐茂菊蔵

東京六区

辺泥和郎

1947年4月30日投票 北海道会議員選挙

日高支庁

小川佐助⁽¹²⁾

この、1946~47年当時における国政・道政選挙へのアイヌ民族の立候補は、アイヌ民族の近現代史に関する歴史叙述の中で比較的着目されてきた出来事の一つである。

例えば榎森進『アイヌ民族の歴史』(草風館、2007年)は、第10章「立ち上がるアイヌ——戦後編」の中に「国政・地方選挙に初めて立候補」の節を設け、竹内渉『戦後アイヌ民族活動史』(解放出版社、2020年)は第2章「GHQ施政下のアイヌ」の中で「各種選挙にアイヌが立候補」の節を設け、それぞれにこの動きを取り上

(5) 同前、41ページ。なお、前記の記事も、この文章も、和人で道庁職員をつとめた喜多章明によるものと考えられるので、喜多の個人的な考えが反映している可能性を留保しなければならない。

(6) 国立民族学博物館の標本資料データベースで検索することができる。このことは本稿の査読者からの教示による。著者自身の調査の不徹底を恥じるとともに、この件も含め多くの教示・示唆をいただいた査読者の方々に深くお礼申し上げる。

(7) 本稿では、本人も何らかの機会に自らがアイヌ民族としての自己認識を表明していることが確認できた候補者を対象とした。以下本稿では、このような人々を「アイヌ民族の候補者」とする。もちろん、この定義・視野におさまらないところに、様々な候補者・議員・首長がありえることを留保しておく。

(8) 辺泥和郎については、『アイヌ文化史辞典』(吉川弘文館、2022年)259ページに略歴や参考文献をまとめたので参照されたい。

(9) 川村三郎については、その経歴などをまとめた文献は未だ見られない。例えば樺太アイヌ史研究会(編)『対雁の碑』(北海道出版企画センター、1992年)などを参照。

(10) 戦前の例について、例えば筆者は『近代アイヌ教育制度史研究』(北海道大学図書刊行会、1997年)314~315ページでいくつかの例を紹介している。また戦後の例として、具体的な自治体名・人名を挙げているわけではないが、アイヌ民族の市町村議会議員が少なからずいることを前提として、議員たちの連携を呼びかけた貝澤正「ウタリーである市町村会議員で話し合いの場をもとう」(『先駆者の集い』第4号、1973年1月号)や、本稿で取り上げている戦後の総選挙の際の自身の体験を回想した貝澤正「アイヌと選挙」『先駆者の集い』第21号、1978年5月)がある。

(11) 佐茂菊蔵についても、今のところまとまった伝記的な記録は見当たらない。『北海道大百科事典』(北海道新聞社、1981年)に立項があり、その内容は一部改編され『北海道歴史人物事典』(同、1993年)に再録されている。このほか岡村正吉「新 北海道に生きる 連載100 北海道長官選挙出馬 佐茂菊蔵」(『クオリティ』第21巻3号、1986年3月)は比較的記述量の多い評伝である。また後述する堅田精司『北海道社会文庫通信』は、第1235号(2000年10月16日付)、1339号(2001年1月28日付)で佐茂菊蔵を取り上げている。

(12) 小川佐助については前掲『アイヌ文化史辞典』71~72ページに略歴や参考文献をまとめたので参照されたい。

げている。いずれも、日本の敗戦直後にアイヌ民族の社会活動が活発化した時期の、社団法人北海道アイヌ協会とその役員、支部などによる活動や、高橋真による『アイヌ新聞』の刊行などの動きの一環として、これらの立候補を位置付けている点が共通している。

リチャード・シドル（マーク・ウインチェスター訳）『アイヌ通史』（岩波書店、2021年：原著『Race, Resistance, and the Ainu of Japan』Routledge、1996年）は、204～205ページにおいて「戦後初期には新たな民主主義的自由に参加するアイヌがいた」としてこれらの立候補を取り上げ、立候補者の氏名のほか得票数・得票順位などを紹介する。同書も、これを同時代に『アイヌ新聞』の編集・発行に取り組んだ高橋真の活動などの関わりの中で取り上げている。当時の戦後日本の社会状況の変化の中で、その後間もなくして急速に「アイヌは（日本社会の中で—小川注）ほとんど話題にされな」い時代に入ることを見通した叙述となっている点が特色である。

堅田精司「大^[ママ]河原徳右衛門と辺泥和郎の得票」（『北海道社会文庫通信』343号、1997年11月16日付）は、この総選挙のアイヌの立候補者を「二人」とするなど、今日から見れば幾つかの不備はあるものの、この総選挙を少年時代に体験した歴史家の叙述として意義がある。堅田は、大川原と辺泥の市町村ごとの得票数を掲げてそれぞれの得票の特徴を指摘しつつ、「辺泥の手作りのポスター⁽¹³⁾に、好感を持つ人がいました」等の、当時堅田が暮らしていた札幌市内の状況を記録している。

本稿では、堅田のこの記事と重複するところはあるが、本資料の解題を補う意味で、第22回総選挙における大川原、辺泥、川村の3名の市町村別得票を示す（表1）。

2 三浦政治の書簡

2-1 資料の一覧と寄贈の経緯

次に紹介するのは、アイヌ史上では1923（大正12）年5月から1926（大正15）年8月まで春採尋常小学校の教員を務めたことで知られる三浦政治（1880～1962）の、書簡42点である。資料の一覧を表2に示した。書簡の多くは三浦政治発であるが、一部親族の発信を含む。

書簡は全て封書で、墨書またはペン書きである。若干の例を写真3に示した。

これらの書簡は、ほとんどの宛先となっている三浦政治の親族が保管してきたもので、この親族と交友のあったキリスト教史研究者・高木謙次氏より、先ず公益社団法人北海道アイヌ協会に寄贈の相談があり、同協会事務局長貝澤和明氏ならびに関係各方面と協議の結果、当館への寄贈の打診に至り、アイヌ史・教育史・キリスト教史の資料としての重要性を踏まえ、当館において寄贈を受けることとしたものである。

本資料には、三浦政治の春採着任前から在任中のものが9点あるほか、春採離任後から晩年までのものが多数あり、春採での様子をはじめ、三浦政治の生涯を伝える資料群の一部をなすものと考えられる。親族間の書簡であり、関係者のプライバシー等に配慮した慎重な取扱が求められるが、三浦政治の生涯と春採での活動などを伝える重要な資料となり得るものである。それぞれの書簡が生涯の中のどの時期のものであるかを示すため、表3として三浦政治の略歴を付記した。

なお寄贈前において既に高木氏により書簡42通について解読等が作成されており、当館での受入ならびに本稿作成に当たりたいへん助けられた

2-2 三浦政治関係資料と本資料群の位置

三浦政治は宮城県遠田郡北浦村（現遠田郡美里町内）に生まれ、宮城県内で小学校教員をつとめ、1898（明治31）年に北海道倶知安に移住、北海道各地で小学校教員をつとめた。春採尋常小学校には、自らアイヌ児童に対する教育への従事を希望した結果の着任だったとされる。

同校在任中において学校の教育条件の劣悪さを訴えてその改善を求め、さらに「土人保導委員」をつとめる中でアイヌ民族に対する施策の問題を指弾し生活基盤の構築を目指したが、行政当局に対する指弾を続けたことに対し、厚岸郡太田への転任が命じられ、不本意ながら春採を去った。キリスト教の信仰に基づく教育実践や教育論の発表、無教会主義キリスト教伝道者として知られる浅見仙作との交友や、内村鑑三、宮部金吾とも接点を持ったことが知られている。

(13) 当館総合展示では、公益財団法人大阪人権博物館が所蔵する、辺土和郎の選挙ポスターの複製を展示している（写真②）。この選挙ポスターは、収集者によれば、この第22回衆議院議員総選挙のとき札幌市内に掲示されていたものであるとされており、ポスターが「手作り」だったとする堅田の回想と合致する。

なお、公益財団法人大阪人権博物館は、2023年3月22日付けで、所蔵する資料を大阪公立大学に寄贈することについて同大学に申し入れを行い、2025年度以降を目途とした実現に向けて双方で協議を重ねることを発表している。（公益財団法人大阪人権博物館ウェブサイト中の、「当財団の見解／大阪公立大学への人権資料の寄贈と今後の方向」による。https://www.liberty.or.jp/cp_pf/index2023.htmlを2023年12月15日確認）。同財団がこのような判断に至った経緯及び今後に向けた考え方についてもこのページに記載がある。

三浦政治については、特に1970年代後半からのいわゆる民衆史運動の中で春採尋常小学校での活動などに注目が集まり、松本成美・秋間達男・館忠良『コタンに生きる アイヌ民族の歴史と教育』（現代史出版会、1977年）などで紹介されるに至った。

さらにこれらの編著者らによる三浦政治研究会が組織され、三浦政治が遺した日記等の資料の調査・研究と、三浦政治の足跡やそれらの歴史的意義の検討を主題とした研究誌『黙牛野叟通信』も刊行され（第2号までの刊行が確認できる。1、2号とも1979年）、第1号には相馬述之による判7ページにわたる年譜も掲載されている⁽¹⁴⁾。

この研究会にも属していた小田切正はその後、北海道民間教育研究団体連絡協議会の機関誌『民教』に「教師三浦政治研究のための覚書」を連載し、三浦政治の日記や様々な手記、文書や当時の新聞・雑誌報道等を主な素材として、その生涯、特に教育実践の足跡をあとづけている⁽¹⁵⁾。

また、民衆史運動等とは思想的・政治的な立場をやや異にしていた新谷行も、『アイヌ民族と天皇制国家』（三一書房、1977年）において、三浦政治が遺した春採の人々の給与地にかかる記録の紹介を通して、「北海道旧土人保護法」による給与地策の実態がアイヌ民族の生活を支えるものではなかったことを指摘し、三浦の活動の意義に言及している。

ただ、こうした1970年代後半から1990年前後における着目の高さ比べると、近年は三浦政治への着目は少なくなったようにも感じる。本稿ではこの機会に三浦政治に関する研究が改めて進むための基点をつくれればとの思いから、三浦政治を主題にした主な文献（資料紹介を含む）のリストを表4にまとめた。

三浦政治の生涯をたどり、その活動や思想などを検討するにあたり、もっとも基本的な資料は三浦自身による

日記であり、さらには、三浦が雑誌等に寄稿した文章、三浦の活動を報じた同時代の新聞記事⁽¹⁶⁾などがありえる。この度受け入れた資料は、これらと比べれば、位置付けとしてはあくまで補足、参考というものになると思うが、2-1にも述べたとおり、既往の三浦政治に関する研究をさらに進める可能性を有する資料だと考えるものである。

参考文献

【大川原徳右衛門選挙ポスター】

- ・榎森進『アイヌ民族の歴史』、草風館、2007
- ・堅田精司「大河原徳右衛門と辺泥和郎の得票」『北海道社会文庫通信』343号、1997
- ・リチャード シドル（マーク ウインチェスター訳）『アイヌ通史』岩波書店、2021
- ・竹内渉『戦後アイヌ民族活動史』、解放出版社、2020
- ・鶴川町史編纂委員会（編）『鶴川町史』、鶴川町、1968
- ・鶴川町史編纂委員会（編）『続 鶴川町史 資料編』、鶴川町、1991
- ・萌別地区アイヌ生活文化伝承の会（編）『平成12年度 萌別地区百年の記録 ～萌別備荒貯蓄組合のあゆみを中心として～』、同会、2001

【三浦政治書簡】

- ・松本成美・秋間達男・館忠良『コタンに生きる アイヌ民族の歴史と教育』、現代史出版会、1977
- ・新谷行『アイヌ民族と天皇制国家』、三一書房、1977
- ・三浦政治研究会『黙牛野叟通信』創刊号、1979
- ・三浦政治研究会『黙牛野叟通信』第2号、1979
- ・竹ヶ原幸朗・小沢有作「アイヌ教育関係文献目録（増補版）」『教育史・比較教育論考』11、1984

付記

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））「近代日本におけるアイヌ民族の〈社会への参画〉の歴史に関する基礎的調査研究」（研究代表者：小川正人、研究期間：2020～2023年度、研究課題番号20K00952）による研究成果の一部である。

(14) この年譜は、表題こそ「三浦政治略年譜」であるが、7ページ、100項目以上におよぶ。著者相馬述之は「今後の研究の手助けになるもの」「政治の生涯のアウトラインを組み立てる上で、この年譜を活用願いたい。」としている。

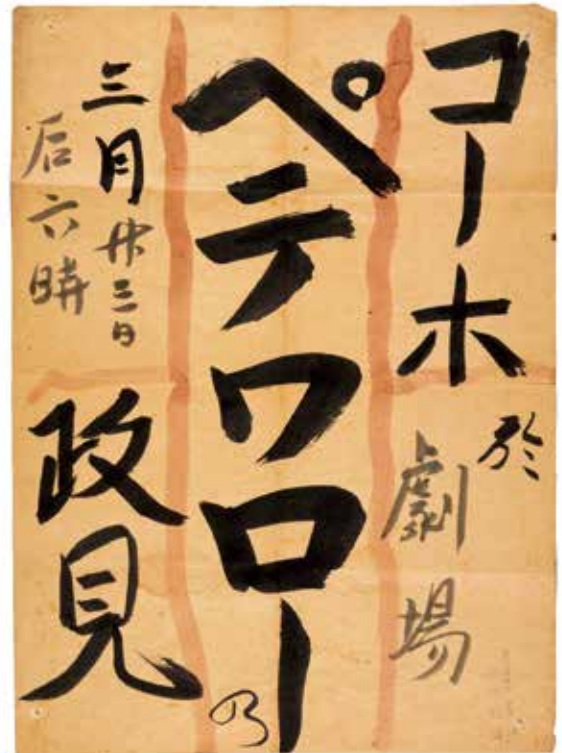
(15) なお、三浦政治が作成した文書のうち、「北海道旧土人保護法」による給与地の状況や、春採地域の生活実態に関する調査記録は、給与地制度の運用実態の酷さや、春採の人々が置かれた状況の厳しさを伝える重要な記録であると思うが、それだけに、多くのプライバシー情報を含む、きわめて慎重な取扱を要する記録でもある。小田切正の連載や本文の次の段落で紹介した新谷行の著作は、こうした情報をそのまま掲載しているものが多い。これらの閲覧には強い注意が必要であり、利用にはさらに然るべき配慮を要すると考えている。

(16) 例えば春採在任当時の『釧路新聞』の報道については、前掲『コタンに生きる』などでもいくつか紹介されている。また筆者も、『北東日報』『釧路新聞』掲載アイヌ関係新聞記事（1901～1942年）：目録と紹介』（北海道立アイヌ民族文化研究センター、2010年）に関係記事を取録している。三浦自身の記録も含めた紹介としては、小田切正「北海道民間教育運動史 史料と解説 補遺 キリスト者の歩んだ道 教師、三浦政治研究のための覚書」（『民教』北海道民間教育団体連絡協議会、第69号～86号、1983年5月～1989年9月にかけて全15回掲載）が今のところ最も詳しい。



写真 ①

写真 ②



[表1] 第22回衆議院議員総選挙における、大川原徳右衛門及び辺泥和郎、川村三郎の得票

北海道第1区 定数14 立候補71

	大川原徳右衛門	辺泥和郎	川村三郎	備考
	農業	農業	漁業	
	勇払郡鷗川村	勇払郡鷗川村	小樽市	
	46	41	42	
	日本自由党	無所属	無所属	
総得票	5,426	5,299	1,325	
順位	61	62	70	

(市部)			
札幌市	232	425	114
函館市	105	143	192
小樽市	50	95	230
室蘭市	179	189	16
夕張市	21	70	16
岩見沢市	6	32	4
(市部計)	593	954	572
(石狩支庁)			
札幌村	13	5	—
篠路村	13	8	—
琴似町	19	24	1
手稲村	7	10	8
豊平町	23	48	12
白石村	19	39	13
広島村	1	3	1
江別町	12	30	26
石狩町	9	22	—
当別村	21	23	3
新篠津村	—	2	—
厚田村	1	9	4
浜益村	34	7	13
恵庭村	25	15	3
千歳町	55	30	5
(石狩支庁計)	252	275	89
(渡島支庁)			
大島村	2	1	2
小島村	1	—	3
松前町	—	1	22
大沢村	—	—	1
吉岡村	2	1	1
福島村	3	1	4
尻〔知〕内村	—	5	4
木古内村	9	8	5
茂別村	4	1	5
上磯町	7	17	7
大野村	6	6	5
七飯村	6	14	10

亀田村	10	13	6
銭亀沢村	2	3	15
戸井村	—	1	5
尻岸内村	6	5	9
楳法華村	2	1	4
尾札部村	—	4	10
白尻村	—	1	21
鹿部村	1	1	5
砂原村	7	—	4
森町	1	7	11
落部村	—	12	6
八雲町	2	26	7
長万部町	20	87	5
(渡島支庁計)	91	216	177
(檜山支庁)			
江差町	—	3	1
上ノ国村	10	4	8
泊村	1	1	1
厚沢部村	—	10	7
乙部村	5	3	3
熊石村	4	5	12
貝取潤村	1	—	1
久遠村	14	4	1
奥尻村	3	—	4
太櫓村	1	5	—
瀬棚村	1	7	8
東瀬棚村	3	5	—
利別村	3	6	6
(檜山支庁計)	46	53	52
(後志支庁)			
西島牧村	1	—	1
東島牧村	1	2	1
寿都町	7	1	2
樽岸村	1	—	1
歌棄村	1	1	3
磯谷村	1	1	1
黒松内村	3	6	—
熱郭村	2	2	2
南尻別村	11	5	9
狩太村	2	5	6
真狩村	1	—	—
留寿都村	2	—	1
喜茂別村	3	6	4
京極村	5	1	2
倶知安町	3	6	1
小沢村	4	1	1
前田村	5	4	—
島野村	1	—	1
岩内町	9	9	17
発足村	9	4	1

※計算上の川村の合計は181となる。

泊村	5	12	3
神恵内村	3	—	6
余別村	1	—	2
入舸村	—	—	10
美国村	1	—	7
古平村	8	1	7
大江村	15	9	1
余市町	22	11	21
赤井川村	2	2	1
塩谷村	3	4	7
(後志支庁計)	132	93	119
(空知支庁)			
北村	4	5	4
栗沢村	6	5	7
幌向村	2	7	2
三笠町	13	17	18
美唄町	23	36	13
奈井江村	—	5	1
砂川町	13	45	11
滝川町	12	64	2
江部乙村	2	8	—
音江村	5	2	—
歌志内町	16	12	19
赤平町	14	16	23
芦別町	24	28	2
由仁村	1	3	2
長沼村	16	16	7
角田村	6	12	5
月形村	2	9	3
浦臼村	2	4	2
新十津川村	15	24	3
深川町	2	11	10
妹背牛村	1	5	3
秩父別町	—	1	3
一已村	5	3	4
納内村	1	1	2
多度志村	5	4	—
雨竜村	3	7	—
北竜村	2	2	1
沼田村	—	3	—
幌加内村	9	6	2
(空知支庁計)	204	361	149
(胆振支庁)			
豊浦村	38	87	7
虻田町	8	18	—
洞爺村	1	—	1
徳舜警村		3	6
壮瞥村	1	4	1
伊達町	112	91	1
幌別村	51	143	2

※計算上の川村の合計は118となる。

白老村	199	51	—	
苫小牧町	129	143	16	
安平村	27	24	6	
厚真町	141	55	3	
鶴川村	1077	622	8	全候補者の中で大川原 1 位、辺泥3位
穂別村	490	131	3	全候補者の中で大川原 2 位
(胆振支庁計)	2274	1372	54	※大川原の計算上の合計は2268となる
(日高支庁)				
日高村	73	2	—	
平取村	757	451	27	全候補者の中で大川原 3 位
門別村	318	132	15	
新冠村	84	173	18	
静内町	204	592	19	全候補者の中で辺泥 4 位
三石村	58	198	4	
荻伏村	78	135	4	
浦河町	87	157	12	
様似村	78	128	—	
幌泉村	103	7	11	
(日高支庁計)	1840	1975	110	

出典:『北海道選挙大観 戦後総集版』(札幌ペンクラブ出版部、1960年)

[表2] 三浦政治書簡 一覧表

番号	日付 (西暦8桁)	日付 (元号)	発信者	発信者住所	宛先	備考
1	19230123	大正12年1月23日	三浦政治	利尻郡沓形港	三浦利康	
2	19230812	大正12年?8月12日	三浦政治	利尻島沓形村	三浦安兵衛	
3	19240105	大正13年1月5日	三浦政治	釧路市春採小学校住宅	三浦安兵衛	
4	19240111	大正13年1月11日	三浦政治	釧路市春採校内	三浦安兵衛	
5	19241007	大正13年10月7日	三浦政治	釧路市官立春採小学校	三浦利康	
6	19241019	大正13年10月19日	三浦政治	北海道釧路市春採	三浦安兵衛	
7	19250107	大正14年1月7日	三浦政治	釧路市春採小学校	三浦利康	
8	19250519	大正14年5月19日	三浦政治	釧路市春採	三浦安兵衛	
9	19250920	大正14年9月20日	三浦政治	釧路市春採小学校内	三浦安兵衛	
10	19390411	昭和14年4月11日	三浦昌寿	函館市杉並	三浦利康	
11	19??1222	昭和??年12月22日	三浦政治	函館市杉並町	三浦利康	発信時期は本文からの推定による。
12	19400310	昭和15年3月10日	三浦昌寿	函館市杉並町	三浦利康	
13	1939?0819	昭和14?年8月19日	三浦昌寿		三浦順子	封筒なし。日付は本文記載による。
14	1939?0924	昭和14?年9月24日	三浦政治	札幌豊平町月寒	三浦順子	※小説「石狩川」が話題にあるので昭和か
15	19450206	昭和20年2月6日	三浦政治	札幌市外豊平町月寒	三浦利康	
16	19451026	昭和20年10月26日	三浦政治	札幌市外豊平町月寒	三浦利康	
17	19531218	昭和28年12月18日	三浦昌寿	小樽市桐生町	三浦利康	
18	19540125	昭和29年1月25日	三浦昌寿	小樽市相生町	三浦利康	
19	19541204	昭和29年12月4日	三浦昌寿	小樽市相生町	三浦利康	
20	19550204	昭和30年2月4日	三浦政治	札幌市外月寒	三浦利康	
21	19550308	昭和30年3月8日	三浦政治	札幌市外月寒	三浦利康	
22	19550325	昭和30年3月25日	三浦昌寿	札幌郡豊平町月寒	三浦和康	
23	19559497	昭和30年4月7日	三浦政治	札幌市外月寒	三浦利康	
24	19570517	昭和32年5月17日	三浦政治	月寒局	三浦利康	

25	19600701	昭和35年7月1日	三浦義章	沙流郡平取町	三浦利康	「昨年空襲にて疎開を命ぜられ」 「昨秋から札幌へ参り」とあるので1946年頃か
26	???0410	??年4月11日	三浦政治	札幌市豊平町	塚本虎二	※「金沢先生」の「講演会」への礼状
27	???0817	??年8月17日	三浦政治	豊平町月寒局区内	浅見仙作	※この度小樽の岩倉組社宅に転居した、とあり
28	19530425	昭和28年4月25日	三浦政治	小樽市相生町	三浦利康	
29	???0915	??年9月15日	三浦政治	小樽市相生町	三浦利康	
30	19530530	昭和28年5月30日	三浦政治	小樽市相生町	三浦利康	
31	???0219	??年2月19日	三浦政治	札幌市菊水西町	三浦利康	
32	19600214	昭和35年2月14日	三浦政治	札幌国立病院	三浦利康	
33	1960?0323	昭和35?年3月23日	三浦政治	札幌市菊水西町	三浦利康	
34	???0624	??年6月24日	三浦政治	札幌市菊水町西	三浦利康	
35	???0413	??年4月13日	三浦政治	札幌市菊水町西町	三浦利康	
36	19600303	昭和35年3月3日	三浦政治	菊水町国立札幌病院	三浦利康	
37	19600313	昭和35年3月13日	三浦政治	札幌市菊水町西町	三浦利康	
38	19600112	昭和35年1月12日	三浦政治 (代筆)	国立札幌病院	三浦利康	
39	1960?0831	昭和35 (25?) 年8月31日	三浦政治	国立札幌病院	三浦利康	
40	19600921	昭和35年9月21日	三浦政治	国立札幌病院	三浦利康	
41	19610630	昭和36年6月30日	三浦政治	国立札幌病院	三浦利康	
42	19630329	昭和38年3月29日	三浦政治	月寒	渡辺るつ子、浅見ゆき子	「昭和38年」は誤りか

・「番号」は、寄贈者により付けられていたもので、必ずしも年月日順とはなっていないが、おおよその生涯に沿った番号と思われるので、本稿でもこの番号に従うこととした。

・「発信者住所」は、それぞれの書簡の記載に従い、原則として市町村名及びいわゆる大字に相当する地域名までを記載した。書簡の記載に従ったため、同じ住所であっても異なる表現になっているところが多々ある。



写真 ③

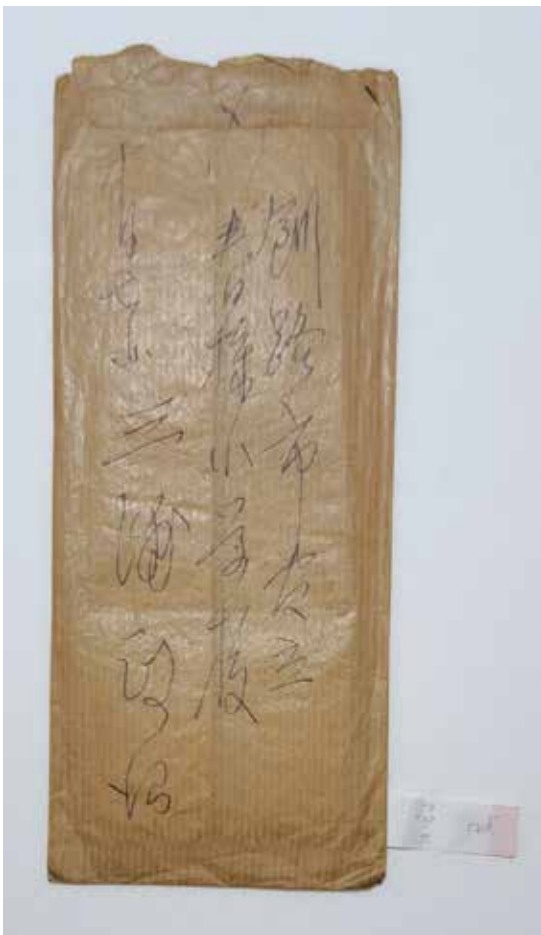


写真 ④

[表3] 三浦政治 略年譜及び主要著作

年月	年齢	ことから・著作
1880 (明治13) 年5月	0	宮城県遠田郡北浦村にて出生
1893 (明治26) 年3月	13	宮城県遠田郡北浦尋常高等小学校高等科を卒業
1893 (明治26) 年4月	13	仙台塾にて学ぶ
1895 (明治28) 年4月	15	宮城県志田郡開設の教員養成所に入所 (1896年9月修了)
1895 (明治28) 年9月	15	石森尋常小学校本科授業を委嘱される。
1897 (明治30) 年2月	17	石森尋常小学校准訓導となる。以後北海道に渡るまで県内小学校の教員をつとめる。
1898 (明治31) 年8月	18	北海道倶知安に移住
1898 (明治31) 年11月	18	倶知安第一尋常小学校准訓導
1899 (明治32) 年2月	19	倶知安第三尋常小学校准訓導 (正教員代勤)
1900 (明治33) 年	20	「座右銘」 (『北海道教育雑誌』)
1901 (明治34) 年9月	21	北海道師範学校の本科正教員講習科受講
1902 (明治35) 年3月	22	北海道師範学校の本科正教員講習修了、正教員免許を取得。
1902 (明治35) 年4月	22	倶知安第一尋常小学校訓導兼校長
1903 (明治36) 年5月	23	古宇郡神恵内尋常小学校訓導
1904 (明治37) 年8月	24	同校依願退職
1904 (明治37) 年9月	24	石狩郡当別尋常高等小学校尋常科訓導
1905 (明治38) 年8月	25	磯谷郡磯谷尋常高等小学校尋常科訓導
1906 (明治39) 年11月	26	妻と入籍
1908 (明治41) 年1月	28	石狩郡当別尋常高等小学校尋常科訓導
1908 (明治41) 年9月	28	石狩郡高岡尋常高等小学校訓導兼校長
1909 (明治42) 年3月	29	早稲田大学校外生文学科修了。このころ浅見仙作に会う。
1913 (大正2) 年10月	33	利尻郡雄忠志内尋常高等小学校校長兼訓導
1916 (大正5) 年6月	36	「教師と信仰」 (『北海之教育』第281、282号 (1916年6、7月号) 連載)
1917 (大正6) 年5月	37	利尻郡美也古呂尋常小学校校長兼訓導
1917 (大正6) 年7月	37	札幌独立教会会員となる
1920 (大正9) 年3月	40	早稲田大学校外生政治経済科修了。

年月	年齢	ことごと・著作
1923（大正12）年5月	43	利尻郡美也古呂尋常小学校退職
1923（大正12）年5月	43	釧路市官立春採尋常小学校代用教員
1923（大正12）年6月	43	釧路市官立春採尋常小学校校長兼訓導
1923（大正12）年12月	43	釧路市長より「土人保導委員」委嘱の通知を受ける。
1925（大正14）年2月	45	『釧路新聞』が2月17日付けが記事「土人教育に殉ずる／使途の意気／本紙の記事を肯定し／三浦校長所信を述ぶ」を掲載、三浦政治の「所信」を報じる。
1926（大正15）年8月	46	釧路市官立春採尋常小学校退職
1926（大正15）年9月	46	『釧路日々新聞』が9月4日、5日付け記事で、三浦政治の春採尋常小学校からの転任に対し、地域住民が不当な転任として強く反対していることを報じる。
1926（大正15）年	46	厚岸郡太田第二尋常小学校校長兼訓導
1926（大正15）年6月	46	「内村先生の修養大意に就いて」「甲子運合の一筋」（『釧路外五郡教育会報』第1号）
1926（大正15）年	46	「学校植樹管見」（『釧路新聞』）
1927（昭和2）年11月	47	厚岸郡太田第二尋常小学校退職、函館市大森尋常小学校訓導
1932（昭和7）年3月	52	函館市高砂尋常小学校訓導、同夜学校訓導
1936（昭和11）年5月	56	函館市高砂尋常小学校退職（定年）
1936（昭和11）年10月	56	私立開発塾開設
1945（昭和20）年7月	65	私立開発塾閉鎖
1945（昭和20）年8月	65	苫前郡苫前町力昼に疎開
1945（昭和20）年9月	65	札幌に転居
1947（昭和22）年6月	67	石狩郡当別町川下に転居
1948（昭和23）年2月	68	豊平町月寒に転居
1952（昭和27）年9月	72	小樽市相生町に転居
1954（昭和29）年10月	74	豊平町月寒の長女宅に転居
1955（昭和30）年6月	75	石狩市生振の長男宅に転居、
1955（昭和30）年11月	75	札幌市内の国立病院に入院（以後、同年12月退院、1957（昭和32）年2月再入院、同年3月退院、この間、市内の子どもの家で暮らす。
1962（昭和37）年6月	82	病のため死去

凡例及び出典：

- ・略年譜については、主に相馬述之「三浦政治略年譜」『黙牛野叟通信』第1号により、一部を当時の新聞や小田切正「教師、三浦政治研究のための覚書」等で補いながら主要な事項を抽出した。
- ・主要な著作については、上記の文献を参照して主な著作を抽出し、略年譜の事項に対し行頭を一文字程度下げて区別した。記載にあたっては、論文等の場合は表題を「 」で括り、その後に所収書名等を記載し、単著の場合は『 』で括った。
- ・年齢は、いわゆる数え年より1年少ないかたちで示している。

※三浦政治による記録資料としては、この年譜等に挙げたほか、多くの手記・報告類がある。

それらの一部は上掲「教師 三浦政治研究のための覚書」等に掲載されているが、その全体像を俯瞰し、適切かたちで共有されるための作業が今後の課題であることを付記しておく。

[表4] 三浦政治に関する研究・関連資料紹介 主要文献とその概要

年月日	編著者	文献名	所収、掲載ページ
備考・略内容			
1978 (昭和53) 年7月28日	松本成美 (編)	『迫害に抗して コタンに生きた 三浦政治顕彰碑建立を記念して』 (三浦政治顕彰碑建立期成会発行)	本文90ページ
主要目次：口絵写真／一部 三浦政治顕彰碑建立／二部 三浦政治の論考／三部 三浦政治の評価／附録 (春採小学校の沿革 ほか)			
1979 (昭和54) 年8月15日	阿部敏夫	「三浦政治の全生涯」を、近現代史の中で	『黙牛野叟通信』創刊号、1ページ
1979 (昭和54) 年8月15日	小田切正	三浦政治研究その1 「教師・三浦政治」研究のための覚書	『黙牛野叟通信』創刊号、2～11ページ
末尾に、「資料」として、黙牛野叟 (述) 「開発パンフレット 第四冊 昭和八年 世界改造 美化奉仕」の一部を掲載。			
1979 (昭和54) 年8月15日	松田平太郎	三浦政治を思う	『黙牛野叟通信』創刊号、11ページ
1979 (昭和54) 年8月15日	橋本左内	偉大なお爺ちゃん	『黙牛野叟通信』創刊号、11～12ページ
1979 (昭和54) 年8月15日		大正十三年の日記から	『黙牛野叟通信』創刊号、12ページ
1924 (大正13) 年12月の三浦政治の日記を紹介。			
1979 (昭和54) 年8月15日	相馬述之	三浦政治略年譜	『黙牛野叟通信』創刊号、13～19ページ
1979 (昭和54) 年11月15日	相馬述之	高砂尋常小学校について	『黙牛野叟通信』2号、1～4ページ
『函館市学事一覧』、『函館教育』第202号からの同校関係資料紹介あり。			
1979 (昭和54) 年11月15日	小田切正	三浦政治研究ノート (2) 教育勅語・学校訓問題と、キリスト者三浦政治	『黙牛野叟通信』2号、5～18ページ
末尾に「資料」として三浦政治「教師と信仰」(『北海之教育』第281号、1916年所収)の一部を掲載。			

年月日	編著者	文献名	所収、掲載ページ
備考・略内容			
1983（昭和58）年5月25日～ 1990（平成2）年1月31日	小田切正	教師、三浦政治研究のための覚書 （1）～（16）	『民教』第69号～87号連載
全16回の連載。毎回8～10ページ程度の分量で、三浦政治の生涯をたどりつつ、日記、手記、三浦による報告書類、当時の新聞報道などを随時翻刻・紹介している。のち小田切正『北海道民間教育運動史 道民教機関誌「民教」掲載論文』（上・中・下3巻、北海道民間教育研究団体連絡協議会、2005年）に再録されている。（なお、紹介されている資料には、前述のとおり、本来であれば非公開とすべき情報を含むものがあるので、閲覧、利用には相当に慎重な注意を要する。）			
2002（平成14）年9月10日		三浦政治 釧路でアイヌ民族の子供たちの教育に心血を注いだ教育者	『続 ほっかいどう百年物語』（STVラジオ編、中西出版発行）
2004（平成16）年6月25日	合田一道・番組取材班	三浦政治 アイヌ民族の教育に努力	『NHKほっからんど212 人間登場 ～北の歴史を彩る～ 第3巻』（北海道出版企画センター発行）
2003年10月10日NHK札幌放送局「NHKほっからんど212」での放送内容をまとめたもの。			

注：

- ・「備考・略内容」については、特に記載すべきものがない場合は割愛している。
- ・三浦政治の生涯と同時代における新聞報道などは割愛した。これらは本リストに掲載した諸文献に多く掲載されているが、なお遺漏もある（例えば山本多助、吉田巖らのもとに遺された三浦政治発書簡など。）[表3] で取り上げた三浦自身の著作、記録類を含めた三浦政治書誌ともいうべき資料群の把握は別の課題としたい。

Introduction of Objects Entering Museum Collection during 2023 Fiscal Year, part 2:

The Poster Used to Promote Political Views of OOKAWARA Tokueemon and the Letters from MIURA Masaji

OGAWA Masahito

This paper introduces The poster used to promote political views of OOKAWARA Tokueemon, a native of Mukawa, located in the Iburi region of Hokkaido, during his April 1946 House of Representatives election campaign, as well as letters from MIURA Masaji, known for his role as a teacher at an elementary school for Ainu children in Harutori,

Kushiro City, Hokkaido.

In addition to providing a summary of the materials, this paper further includes details on OOKAWARA Tokueemon's election results, as well as a summary of existing research on MIURA Masaji. This context is essential for understanding the significance of these materials.